寺地孝之著『近代金融システム論』

佐村明知

た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。 た、きわめて意欲的な研究書である。

をがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる をがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる たがっていくらか具体的に紹介し、若干の論評をくわえる

第一部では、一八三〇年代頃からイギリスを中心として

とその背景を明示した序章、

および金融システムの形成過

まず、

本書の全体的な構成についてふれると、

研究課題

ことにしたい。

168

閣 あったベアリング商会の経営やそのイギリス国内金融 精力的に試みるとともに、 めぐる諸 を媒介に国 金融システムが形成され、 に対するポジティヴな影響等を考察する めて資料の少ないマーチャント・バンカーの行動の分析を (布目真生他訳『マーチャント・バンキングの興隆』 九八七) 問題がとりあげられる。 [際化されていくなかで生じた一八三七年恐慌 のなかで強調するところだが、 それがマーチャ とりわけ当時 S・チャップマンもその の主力バンカー ント・バ (第一章)。 著者は ンカ そし きわ 有斐 市場 0 1

て、 な対応やその他 興味深い事実も散りばめられている マスコミ 抽出している。 操作やロビー工作あるい 0 とくに、 商会の経営の変化、 ベアリング商会の対応策とし は宗教者の利 (第三章)。 専門化傾向 を分 用 な

州

債

のデフォールトの展開状況と、

る従属的関係を、

る

(第二章)。

また、

八

ベアリング商会の四〇年代前半の合

衆国

積

極

た方向に導いたのである。

て、

この恐慌の伝播、

つまり、

英米貿易を通じての合衆国

金融市場

への影響や合衆国南部経済のイギリス経済に対す

アミンの従属理論に重ね合わせなが

ける中央銀行システム、すなわちイングランド銀行の中央本書の中心をなす第二部においては、まずイギリスにお

四章)。 占銀行、 条件をイングランド銀行が満たしていたかどうかを検討 し手、(五)金融政策の運営主体であることとし、それ 銀行化過程 下(フリー・バンキング・システム) 六年)の解散以降、 りあげる。 合衆国における金融システムをめぐる諸問題を集中的にと し、この段階での中央銀行システムの成立を確認する る。そして、 たという事実とそれに対する鋭い問題意識が著者をそうし クソン大統領による第二合衆国銀行 (一八一六年—一八三 著者は、 (二)政府の銀行、 むろん、それには理由がある。 が、一八三九年恐慌の分析を通じて考察され 中央銀行たることの必要条件を、 これ以後第五章から第九章にわたって、 中央銀行が存在しないという金融状況 (三)銀行の銀行、 において経済発展とげ 合衆国は (四)最後 (一)発券 5 の質 ジャ 独 0

11 二合衆国銀行が、 設立された第一合衆国銀行 合的に捉えるためのステップとして、 著者は、 たのかを、 すでに両行ともに原初的な中央銀行としての機能を したがって、この金融システム上の大問題 必要条件に照らし合わせながら、 中央銀行としての機能をどの程度有して (一七九一年—一八一一 ハミルトンによって 丹念に検証 年 や第 を総

章)。 銀行の設立計画の内容と経緯を明らかにしてい 経済的根拠無しと断罪し、 回状」と第二合衆国銀行の特許更新の拒否を、 としての機能を担い、 紙幣の分析をとおして、 (第七章)。 0 0 展開 てい とは 時 たとする 61 期に一 0 え、 4 そのジャクソン大統領 で、 定重なる一 (第五章、 著者は、 金融シ 合衆国財務省が そして幻に終わっ 第六章)。 九世紀初頭において、 ステムを補完してい ジャクソン大統領 また、 0 無謀な行 第 た第三合衆国 部 近視眼: 一合衆 たとい 3 0 中 央銀 財 61 正 第八 的で が、 務省 国 貨 う 行 銀

大い

なる金融システムの実験を誘い、

かつまたロ

グ・

ター

ムには合衆国の経済発展をも導いたとすれば、

そのそ >

こと自体きわめて興味深

4

争前 不在の金融 題 ステムの実態の把握と分析をおこない、 第九章は、 や金幅 の時期やスコットランド産業革命期に ってよかろう。 の安定 システム状況、 そうし の問題を鋭く探究した、 た問題意識をふまえ、 F A すなわち ・ハイエクの フリ 1 本書の 合衆国 成長通貨 . おける中 『貨幣発行 15 ンキ 焦眉 0 央 南 0 供給 銀行 自 0 北 曲 章 戦

化論

慎

訳

東洋経済新報社、

九八八) 「自由」

に

触発 の範囲

3

を n

たとはい

え

とりわけ、

銀行業参入の

は、 もう少し厳密に規定した議論が 歴史分析をしっかりと踏まえているだけに説得力が 必要」 とい う著 者 0 言 葉

る。

てい には、 n ブ は、 B け グズの倒産劇をとりあ 因が、 をもたらし、 ち「一八二八年体制」 元凶であるベアリング商会の経営組織変革の遅 証制度によるものであったこと、 観点と経営史的観点から分析することによって、 ベアリング恐慌前後のベアリング 九 ·経営戦 返 る内部管 恐慌期の当商会の財務状況の類似性を指摘し、 第三部の終章にいたる三つの章では、 る。 す 読者の要望に応えるか 九五年に起きたベアリングズ事件にともなうベアリン 基本的 ハイリスクなアルゼンチン関連公債 略にか to 理やリス 0 事実上の破綻と恐慌を誘発したとする。 なのかもしれない」との結論 には当時のアルゼンチン政府のとっ か わる諸問題を的 ク・ げ、 の持続と権限委譲の失敗が、 7 、ネジ か のように、 つての一 メントの欠陥など経営組 確 さらにまた、 商会の経営を、 VZ くしくも一 摘出 九世紀末のベアリン まず一八九〇年 への過度な投資 (終章) 「歴史は繰 この恐慌 n 世紀 恐慌 両者に た配当保 経済 に至 結果的 すな 史的 0 お

規制が規定されているということである。

動産抵当証券など)

の州監督官への預託、

その他の厳格な

このことは、

経

とも三つの貢献を指摘しておこう。 多く示してくれる。ここでは、 これまで紹介してきたように、本書は有意義な知見を数 金融史研究における少なく

チャント・バンカーを果敢にとりあげ、 をなすとともに、 第一に、きわめて資料が少なく研究が進んでいない 新しい一九世紀金融システム像を提示したことであ 金融システムのなかにかれらを組み込 その多角的な検討 マー

る

て 提示したということである。 である。評者にとってとりわけ興味深いのは、 南北戦争前におけるフリー・バンキングの実証研究によっ の成立などとするなかで、 グランド銀行やピール銀行条例をもって近代金融システム トラル・バンキング・システムを無批判的に信奉し、 わゆる中央銀行システムを相対化しようとしたこと フリー・バンキングに関する重要な実証研究を 産業革命期のスコットランドや 金融史研究者の多くが、 合衆国各州 イン セン

> 済学者によってしばしば完全な市場とか、 取引が高度に規制 かされるもの ない」というパラドックスでもある。 それは、「規制というシステムのないところには、 市場・法』東洋経済新報社、一九九二) のなのだ、というR・コースの卓見(宮沢健一他訳 (株式取引所など) ほど、実はそのなかでの (政府の規制とは異質な) されているも をおもいださせる。 完全競争市場と 自由も

クトルが示されているといってよかろう。 が結実しており、今後の金融史研究の方法論上の新しいべ としていることである。 研究とを融合させる」(本書「はしがき」)ことを、 きた金融史研究と金融論の分野ですすめられてきた金融史 第三は、著者の「経済史・経営史の分野ですすめられて 本書には、そうした著者のねらい ねらい

けではない。以下、紙幅の許す範囲で、そうした点にふれ きたが、 ところで、これまで本書のポジティヴな点を中心にみて 評者としてもすべからく著者の見解にくみするわ

ク州の同法には、

定の担保物件

(国債、 たとえば、

州債、

利付き不

ニュー

E I

における自由銀行法の内容である。

てみよう。

貿易の急速な拡大とともに、 理が伴うであろう。 行システムの成立如何の問題を解明するには、 当時の国内金融では重要な役割を果たしていた株式銀行や るわけであるが、 テムの理解においてもみられる。 リス国内金融のそうした重層的展開を無視しては、 手形割引市場を十分に組み込んでいないことである。 チャント・バンカーとイングランド銀行のみをとりあ は、 ベアリング恐慌の措定が望まし まず、大きな視点からみた場合の問題点として、 イギリス 0 国 そうした国際金融状況をふまえた上での 内 これに類似したことは、 金融システ 国際金本位制が大きく進 42 4 0 九世紀後半には、 が把握に お 国際金融シス いて、 いささか無 中 国際 央銀 イギ 著者 げ、 展 マー す

大規模企業と多数の小規模企業というような二 示しており、 ジティヴな解釈は 批判的に受容する面がなきにしもあらずで、「金 なくとも一九世紀前半イギリスの工業化の実態は、 ム史観」にて提示する産業金融における銀行業の役割 つぎに、著者には、 また、 面 全体としても内部金融が中心であっ R・キャメロンの見解をいささか無 の真理でしかない。 とい 一極化傾 うの 融 小 は システ 数 向 0 0 小 北

あるが、

九世紀前半と世紀末とでは、

国際金融状況が大

そのほ

か、

アリ

ング商会の経営戦略にかかわることで

行システムから延長される解釈は、工業化の実態とはなじ点を重視すべきである。イングランド銀行を中核とする銀による信用ネットの展開をベースとする地域金融という視た。つまり、そうした状況下においては、むしろ非銀行業

みにくいものとなろう。

1. は弱 であろう。 チャント・バンカーを介在させながら、 それほど大きなリアクションを受けたのであろうか むしろ両者の密接、 発展し、 ノースやW・フォーゲルらの研究批判でもあるが、 どのように把握し、 恐慌にからみ、 属的関係を、 (第二章) している点である。 また、 バンカーらは、 17 恒常的に外貨獲得をおこなったことからすれば、 若干気になる点を指摘するとすれば、 しからば、 アミンの従属理論に重ね合わせながら強調 合衆国南部経済のイギリス経済に対する従 不可分な経済関係を強調する方が的確 解釈するかは大きな問題である。 綿花投機や土地投機によって、 支配国である英国経済やマー 一九世紀中葉の南部 南部経済は大きく 一八三七年 批判力 何故に チャン 経 マー 済を D

的におこない、 は、 幅に チャイルド商会その他の支援体制も、そうした国際金融市 年のベアリング恐慌にともなうイングランド銀行やロ に量的にも質的にも大きく変化するからである。一八九○ イギリスは、一八七○年代以降膨大な資本輸出を継続 異なっていることを考慮すべきであろう。 国際金融市場が、 ロンドンのシティを中心 といい うの ス

は、

場のあり方と深くかかわっている。

が、 化論』)の原題が『Denationalization of Money』であ そうした動きと密接にかかわり合いながら進展するであろ であろう。 行システムの枠組みを越えて展開しうる可能性を示唆する えつつ、フリー・バンキング・システムが、 ネットワークは、まさしく二つの方向で高度な規制をふ た金融システムの展開や国境内の非集権的な地域金融 たことおもえば、 とである。けれども、 キング・システム支持に傾斜しているようにおもわれるこ なってはいるものの、著者は結論的にはセントラル 最後に、 フリー・バンキングに関する重要な問題提起をおこ むろん、 本書の本論(第二部)にかかわることで 今日のEUにおける国境 著者の指摘する電子マネーの流通も、 かのハイエクの著書(『貨幣発行自 (政府)を越 既存の中央銀 ある え 0

> そこなうものではない。 大いなる期待でもある。 望蜀 優れた内容もちかつ魅力的な本書の価値をいささかも の嘆がすぎるやもしれないが、 もとより、 それらの評者の見解 評者の著者に対する

う。

寺地孝之著 ₩+三○五頁、 『近代金融システム論』、 本体三六〇〇円 (さむら てるとし・大阪大学経済学部教授 (有斐閣、 一九九八年